

ハーマン・メルヴィルの小説における「男らしさ」からの逸脱

高橋 愛

広島大学大学院総合科学研究科

Deviation from “Manhood” in Herman Melville’s Novels

Ai TAKAHASHI

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

論文の要旨

本論は、19世紀中葉に活躍したアメリカ人作家ハーマン・メルヴィル(Herman Melville)の初期から晩年までの作品を分析することで、彼が作家としてのキャリアを通して、同時代のミドルクラスの白人が信奉していた「男らしさ」の規範への抵抗とそこからの逸脱をどのように描いているのかという点について論じたものである。

メルヴィルは、最初期の作品を除けば存命中に評価されることはほとんどなく、生誕から100年を経て再評価された後にアメリカ文学の正典作家と位置づけられ、盛んに論じられるようになった。メルヴィル研究ではメルヴィルとその作品が様々な観点から論じられてきたが、性をめぐる問題もそのひとつである。特に1980年代に入ってから、ジェンダー研究やクィア批評が隆盛していったことで、セクシュアリティの観点から分析が進められるようになった。それに対し、ジェンダー、特に「男らしさ」をめぐる問題に関しては、アンテベラム期のアメリカ文学という枠組みの中の1例としてメルヴィルが論じられるにとどまっているところがある。本論では、最初期の『タイピー』(Typee, 1846)に始まり、『ホワイト・ジャケット』(White-Jacket, 1850)、『白鯨』(Moby-Dick,

1851)、『ピエール』(Pierre, 1852)、「ベニト・セレノ」(“Benito Cereno,” 1855)、『水夫ビリー・バッド』(Billy Budd, Sailor, 1924)を取り上げ、メルヴィルが同時代の「男らしさ」のイデオロギーに対する抵抗やそこからの逸脱をどのように描き、作家としてのキャリアを積むなかで変化させていったのかを示す。『白鯨』までの前期の作品に関する議論では、この時期の作品には逸脱的な身体が描き込まれる傾向が見られること、また、19世紀のアメリカでは正常／標準的な白人の身体が「男らしい」ものととらえられていたという指摘を踏まえ、傷や欠損のある非標準的な身体に対するメルヴィルの関心から、「男らしさ」の規範からの逸脱について検討する。それに対して『ピエール』以降の後期の作品では、欲望などの内面的な問題が探究されるようになってきていることから、男の男に対する欲望や関心に焦点を当てる。

第1章では、『タイピー』を語り手の青年の主体再構築の試みを描いた物語と位置づけ、「トンモ(Tommo)」という語り手の名前と入れ墨という点から、同時代の「男らしさ」のイデオロギーに対するメルヴィルの抵抗について考察している。「トンモ」という語り手の呼称は、西洋の男として主体の輪郭を固定されることへの彼の抵抗を表すもので、英語名とタイピーの音節を折衷させた

名前を受け入れることにより、彼は西洋と非西洋を融合させたものとして自らの主体を構築しなおそうとしている。しかし、西洋的な「男らしさ」からの逸脱の試みは、入れ墨という問題に直面したことで頓挫する。欧米人旅行者が残した発言を見ていくと、入れ墨には異なった特性を融合させた主体の構築をおしすすめる力があると言えるが、トンモはこのことに気付くことなく島から脱出する。ただしメルヴィルは、オープンエンドな結末を用意することで、身体の変更を介した「男らしさ」からの逸脱にアメリカ人青年の目が開かれる可能性を残している。

第2章では、身体の変更が男の主体にもたらす可能性をメルヴィルがどのように掘り下げていったのかを、『ホワイト・ジャケット』の笞刑をめぐる議論を通して示している。語り手の青年は白人水兵の「尊厳」を踏みにじるものとして笞刑を糾弾する一方で、「真の尊厳」は笞の傷をもものもしないとも語っている。この作品で「真の尊厳」を示す例となっているのは、老水兵アシャント(Ushant)に対する笞刑である。鬚を守るためにあえて背中を傷つけさせるという選択をするアシャントは、市民に認められている身体の実権を行使し、自らの男らしさを示してみせていると言える。アシャントの笞刑を通して、メルヴィルは同時代の「男らしさ」のイデオロギーに抵抗し、そこから逸脱するものを提示している。

第3章では、19世紀当時の「男らしさ」の理念に対するメルヴィルの抵抗が先鋭化している存在として、『白鯨』の主な舞台となるピークオッド号の船長エイハブ(Ahab)について論じている。エイハブは、身体の変更をきっかけにして生と死、さらに、正気と狂気を股にかける存在となっている。階層によって異なる捕鯨船のジェンダー文化に目を向けると、彼は前檣側と後檣側の両方のジェンダー文化を股にかけていると言える。異なった特性を股にかけるエイハブが持つ圧倒的な力は「なにか」と表現されるが、その力は「アメリカの男」という規範的な主体の枠組みを超越する部分だと考えられる。

第4章では、メルヴィルが特異な身体を介して追求した「男らしさ」のイデオロギーに対するオ

ルタナティブとして、ピークオッド号の鉾打ちのクイーケグ(Queequeg)について論じている。彼は「南海の男」とみなされているが、その身体には異なった人種的・民族的な特徴が混在している。さらにその言動を子細に眺めていくと、彼にはセクシュアリティの逸脱やジェンダーの越境も見られる。これらの点を踏まえると、クイーケグは、「南海の男」という主体の枠を引き受けているようであり、その枠組みには収まりきらない存在となっている。

第5章では、『ピエール』の主人公のピエール(Pierre)の性を彼のアイデンティティに影響をおよぼした人物との関係に焦点を当てて分析している。まず母メアリー(Mary)との擬似姉弟関係において、男のアイデンティティを意識させられながら女の特性も保持させられることから、彼は性的に曖昧な存在になっている。彼はイザベル(Isabel)との関係では異性愛の男になろうとするが、弟という立場もあることで混乱に陥る。最後にいとこのグレン(Glen)との対立関係では、彼らが共有する名前を通して彼の性的な曖昧さの問題が再浮上している。『ピエール』は規範的な「男らしさ」からの逸脱をアメリカ人青年にアメリカの地で引き受けさせようとしたテキストになっていることから、この作品において、同時代の社会の「男らしさ」の理念に対するメルヴィルの抵抗の姿勢がより先鋭化したと言える。

第6章では、「ベニト・セレノ」で示される男による男のケアに注目し、これがセレノ(Cereno)、バボ(Babo)、デラノー(Delano)のそれぞれの男らしさにどのような影響をおよぼしているのかを論じている。まずセレノは、ケアを受けて他者への依存を深めていることから「男らしさ」が損なわれている状態にあると言える。次にケアを行うバボは、黒人に対する人種的偏見とジェンダー化されたケア労働のイメージを逆手にとることで、「男らしさ」と結びつけられる知性を持つという実体を隠蔽している。デラノーについては、彼がスペイン船で見せる浅薄さや鈍感さから、彼の船の名前(Bachelor's Delight)にも用いられる「独身男(bachelor)」という存在に象徴される男としての未熟さを露呈させていると言える。さらに、他

者との遭遇を経ても価値観の動揺を経験しない彼は、規範から逸脱するものの存在を認めようとしないうアメリカ社会のカリカチュアになっている。この作品でメルヴィルは、ミドルクラスの白人が信じていた「男らしさ」の理念の不確定さを示すとともに、同時代のアメリカ社会を諷刺的に批判している。

第7章では『ビリー・バッド』を取り上げ、性をめぐる言説が変化しつつあった時期に書かれたこの作品において、晩年のメルヴィルが「男らしさ」の理念からの逸脱をどのように描いているのかを分析している。商船人権号ではビリー (Billy) を子とする「幸福な家族」が形成されていたという点から、ビリーは船員に「男らしさ」からの逸脱をうながす存在になっていると言える。次にクラガート (Claggart) に関しては、「生来の墮落」と表現される特性やその容姿から、彼のビリーに対する関心は同性愛的な欲望だと言える。軍艦というホモソーシャルな体制の秩序維持を職務として

いることから、彼はビリーに対する特別な関心を同性愛嫌悪(ホモフォビア)で表していると言える。ヴァア (Vere) については、ビリーとの関係において、自分の中に発現した女性的なものによる「男らしさ」の動揺を経験したと考えられる。『ビリー・バッド』は、男に対する男の関心が規範的な「男らしさ」と矛盾することなく存立することの困難を示した作品である。ただし、結末に挿入されたバラッドに目を向けると、この作品は、メルヴィルが最晩年を迎えても規範的な「男らしさ」に抵抗を行い、規範から逸脱するような男の性の有り様を言祝ぐものになっていると言える。

本論文での議論から、ハーマン・メルヴィルは、19世紀中葉のアメリカのミドルクラスの白人が理想としていた「男らしさ」に対して抵抗し、そこから逸脱するものを作品に描き込み続けていたと言える。彼は、特定の理念から男らしさを解放し、男らしさの多様性を示そうと奮闘し続けた作家なのである。